

中世アジアの皮革 2. 中国・朝鮮

元北海道大学農学研究科 竹之内 一 昭

1. はじめに

黄河下流域に発展した中国古代の殷の遺跡から、当時農耕や牧畜が行われていたことを知ることが出来る。発見された甲骨文字から絹織物や樹皮織物と並んで獣皮も衣類に使用されていたことが分かる。中国で最も古い鎧は殷代の胸だけを保護する短い皮製のものであった。春秋時代の中期になると、革製の札を綴り合せた鎧が使用された。戦国時代からは鉄製の鎧も使用されたが、革製の鎧も盛んに用いられた。その後、隋や唐の時代にも、皮革と鉄が使用された。服飾制度によって皮革が靴や帯、冠等に使用された。

朝鮮半島の楽浪郡は漢の武帝が設置した郡の一つであり、その古墳には馬具や武具に皮革を使用していた痕跡が認められる。

新羅・高麗時代の服飾制度は中国の制度に準拠し、皮革が使用された。

2. 中国

元の軍隊が鎌倉時代に博多に襲来したことを描いた「蒙古襲来絵詞」では、元軍は綿甲冑を身に付けていた(図1)¹⁾。これには札片さねへんが取り付けられており、その素材は鉄または革だが、鉄片は布地を傷めやすいので、後世の馬鎧のように革片を綴じた方が良く、同時に軽量で動きやすかった。

中国の鞍は戦国時代から漢代にいたるものは革製であるが、三国・南北時代以降は木製鞍が流行した。明代の「三才図会」には、古くは草や皮の敷物が用いられたが、以後革鞍が使用されたとある(図2)²⁾。これには日本の鞍のような鞍橋くらぼね(木製の骨



図1 「蒙古襲来絵詞」に描かれた元の軍人



図2 「三才図会」に描かれた馬具

組み)が無い。鞭は古くは革を用いたが、後に竹を用いた。弓矢を収める葫蘆(ふくべ)や鞞(ゆき)は皮革をもって作るとあり、また弓を収める鞞は虎皮で作られ、虎鞞と称し、二弓を交えて入れるとある。また牌すなわち盾にも革は使用され、旁牌は木を革で束ね、竹立牌は竹を牛の生皮で束ねた^{2, 3)}。

中国では周漢以来、楽器を素材により八種に分け八音と称しており、皮革製のものは革と称し、「三才図会」に太鼓や鼓の類が20余種類も描かれており、日本には見られないものも多数ある²⁾。雅楽に用いられた鼗鼓は長さ8尺、面の直径4尺の大鼓であった(図3)。

履物の素材としては、草、麻および皮が挙げられるが、古くは農民は藁草履を履き、上流階級の人には布の沓を履いた。夏・殷・周の三王朝の頃には皮を用い、天子は黒くて四角、諸侯は白くて四角、大夫は白くて丸い履をはいた³⁾。形により舄・履・鞋・靴などの区別がある。二重底のものを舄といい、単底のものを履といい、皮底で麻や絹で縁取りした足首のないものを鞋といった。革製の靴はもともと大陸の西域の胡服である。鞞とも書き、半長の先の尖ったものである。唐代や宋代の服制令に、革舄と烏皮鞞がある。さらに革ズボンや革帯も普及した。革帯は金玉石角等で装飾された。

男子は革の帯、夫人は糸の帯を用いた。冠には布帛のものもあるが、皮革製のものもある。介幘冠は皮で作られ、飾りが黒漆であり、皮弁は白い鹿皮、韋弁は茜で赤く染めた韋で作られている^{2, 3)}。鞞帽は皮製の帽子であり、頂や縁に獣毛が付けてある。

ベネチアの商人であり、旅行家であったマルコ・ポーロの1271~1295年のモンゴル・中国滞在中の見聞をまとめた「東方見聞録」には、皮革に関する記述が幾つかある^{4, 5)}。中央アジアでは、住民は狩猟に長けており、獣皮で衣類や履物をこしらえていた。布(綿)は貴重で、貴族や身分の高い婦人のみが布の衣服を着ていた。裕福なタタール人の多くは金糸織や絹織物で、鳥の羽毛や黒貂、白貂、シベリア栗鼠、狐等の毛皮で裏打ちされた衣服を着ていた。タタールの軍人は熱湯で煮て強靱にした革の鎧を着け、虎鞞と旁牌を装備しており、遠征の際には、馬乳の入った革袋を持参した(前号の図参照)。この鎧の革はバッファロー(水牛)または他の動物の皮から作られる。カラヤン(大理)地方でも同様の鎧を作っていた。煮(茹)革は仏語ではCuir bouilli、英語ではCuirboulyと称され、またはBoiled leather, Hide dried by the fireとも書かれている。これは日本における鎧の札や刀剣の鐔に使われる練革(煉革)あるいは撓革というものに類似している。旧石器



図3 「三才図会」に描かれた雅楽器
(左から鼗鼓、路鼓、鼗鼓)

時代は、水を皮袋に入れて、赤熱した石の間に吊るし、あるいは温めた石を皮袋に入れて沸かしたと想像でき、これが煮革の起源と考えられる。ノルウェーの中石器時代の住居跡から、革の残欠と沸騰石が一緒に出土している。熱湯に接した皮は一部ゼラチン化し、湯から取り出し乾燥すると非常に硬化する。よって乾燥する前に捏ねたりして用途に応じた形の容器を製造したと考えられる。タタール人の君主が戦争に赴く時には10万の騎兵を率いるとあるので、多量の革が必要になる。大カーン(フビライ)と叔父のナイアンとの闘いにおいて、両軍の指揮官が戦闘開始のナッカー(大きな太鼓、前号の図参照)を打ち鳴らした。大カーンは大祭の折に選ばれた12,000人のケシタンという騎兵に宝石や真珠で飾り立てた衣装を与え、さらに金装飾の革ベルトと銀糸で縫い合わせたカムト Camutあるいはボルガル Borgalという長靴も与えた。カムトは駱駝革であり、ボルガルは馬革である。ボルガルはボルガ在住のブルガリア人が作ったもので、一種のロシア革製であろう。大カーンへの貢献物には、首都カンバルク(北京)の近くの者からは猪や鹿、ライオン、熊、野鳥などがあり、遠方で肉を運び込めない者は皮を処理して送った。これらの皮が武具に使用された。大カーンの狩猟には大きなテントが張られ、外側はライオンの毛皮で、内側は白貂と黒貂の毛皮で覆われ、さらに寝室の柱もライオンの毛皮で覆われていた。なお黒貂は最高の毛皮で、毛皮の女王と称されていた。

タンガート(敦煌)やキンセー(杭州)では死者の火葬の際に、人や馬、駱駝、鞍、武具、金貨などを模った羊皮紙かたどや紙を一緒に燃やした。チベットではラマ僧は常に祈り、祈祷器を肌身離さず持ち歩く。寺院にある円筒形の祈祷器(マニ車 転経器)は

羊皮紙に祈祷文や真言を記してブリキ容器の内側に貼り付けてあり、これを回転させると、お祈りしたことになると言われている⁶⁾。これに類似したものが京都の高台寺にあり、長野の善光寺には、「南無阿弥陀仏」と刻印された車輪状の車(輪廻車)が石柱にはめ込まれており、これを回すと苦惱が抜け出すという輪廻塔がある。

マルコ・ポーロに先行して中国を旅行したイタリアのプラノーカルピンやフランスのルブルクの記述によれば、タタール人は駱駝や牛、羊、山羊、馬等の家畜を飼い、着物は家畜や野生動物の毛皮で作られ、ズボンも革で作る^{7) 8)}。フェルトで寝具類や鞍当て、雨外套等を製造する。住居は小枝と棒切れで枠を造り、それに屋根と側面に雨が透らないように獣脂か羊乳に浸したフェルトを被せる。軍人は武装した馬を1頭持ち、自身も武装するが、ある者は革製の胴鎧を着け、馬にも革製の防具をつける。この革は牛等の皮を手の巾くらいの広さに細長く切り、3、4枚重ねてピッチを塗って貼り付け、それらを革紐か縄で綴じる。鉄製の鎧は鉄片を革紐でつないで作る。冑は鉄または鋼鉄製であるが、首や喉の周りは革で保護する。これらの革は前述の煮た革に相当すると考えられる。タタール人は他民族を支配すると、白熊、黒ビーバー、黒貂、黒狐あるいはドルコリという動物のいずれかの毛皮を1人(赤児も含まれる)1枚貢納させた。

タタール人は河を渡るときには、牛皮の小舟を用い、革袋あるいは丸く切り取った革を紐で袋状にして、それに衣服や持ち物を入れて渡る。なお「三才図会」では、皮船は牛馬の生皮を用い、竹木で縁取りをして形を整え乾燥するとある²⁾。近年の旅行記には、一頭の胴体に空気をつめた革袋に乗って渡河することや多数の牛皮を膨らま

せて作った大きな筏で羊毛や皮革を遠く天津まで運ぶこと、黄河上流域のチベット人が羊の胴体でつくった筏やヤクの皮舟で渡河することが記されている。

タタール人がよく飲用するコスモス酒は多量の馬乳を大きな革袋に入れて、杵でたたいて攪拌して発酵させて造る。タタール人の女の仕事に、皮を鞣し、それを動物の腱で作った糸で着物や靴などを縫うことがある⁸⁾。鞣しには粥状に濃くして塩を混ぜた羊の酸乳を用いる。この溶液は発酵が進んでいるので、乳酸や脂肪およびその分解物が含まれており、一種の油鞣しと言える。近年では牛乳からの酸乳（蒙古語でアイラクまたはアイラカ、中国語でスワンナイツ（酸奶子）またはスワンナイ（酸奶））に食塩や炒米麴（唐黍の炒った粉末）、皮硝（粗製硫酸ナトリウム）等を加えて鞣しに使用する。

タタール人は狩猟によって食物の大部分を得ており、そのために鷹やはやぶさの類を飼っており、首に短い革紐をつけて、獲物の鳥獣に向かって放す⁸⁾。陝西省の唐時代の墓室に、鷹やはやぶさを右肩や右手に止まらせている壁画があり、この時代から鷹狩りが行われていたことを示す。

3. 朝鮮

三国時代（4～7世紀）から使用されていた兜は鉄製であるが、首周りのしころ（鍔・鞆）には鉄札や革をたらした。鎧は歩兵用で形の決まった板状の短甲と騎馬用で小札を革紐でつないだ札甲であった。高麗時代（918～1392）には、鎧に黒革や鉄が用いられた。朝鮮時代（1392～1910）には、猪の生皮を札として、燻した鹿皮でつないだ皮甲も使用された（図4）⁹⁾。

狐・狸・狢（黒猿）などの動物の毛皮でできた裘は防寒用として上古より用いら

れており、後に豹や貂の毛皮も使用された。朝鮮時代の1500年頃には奢侈を抑えるために貂服を制限した。牛や犬の皮の外衣が朝鮮時代末期まで使用された。朝鮮時代に、貂・羊・兔などの毛皮を裏地に、または裾や袖、首の周りに当てた上着（チョゴリ）が女性に好まれた⁹⁾。

履物は中国と同様に上代より、北方系の靴（ファ 深靴）とそれ以外の鞋（へ 浅靴）・屣（ビ 草靴）・屐（クク 木靴）等の履物の総称としての履（イ）に区別されていた⁹⁾。古墳からの遺物として出土した金銅履の内側には皮や布を当てた痕跡がある。履は三国時代に主に貴族に履かれ、新羅時代（7～9世紀）になって靴と履が併用されるようになり、高麗末期には靴が多用された。朝鮮時代には鞋が代表的な履物とされ、靴は官服用すなわち上流階級の専用物になった。靴は底が革で、立ち上がり部分が緞子や毛織、綿などを用い、鞋も底が革で、縁が革あるいは絹でできていた。革の素材としては、牛と馬、鹿の皮が使用された。特殊なものとして、明への使者に下賜した黒貂の毛皮の長靴がある。高麗時



図4 朝鮮時代の皮甲

代の「三国史記」によれば、王族の身分の者（真骨）ですら、紫色の革靴を履くことが禁止され、履には皮、糸（絹糸）、麻を任意に使用してよいとされた¹⁰⁾。真骨に次ぐ身分の六等品の靴には烏麋（黒い大鹿）・皺文（しわ模様）・紫の皮が禁じられ、履には皮と麻を用いた。平民は革靴ではなく麻履をはいた。朝鮮王朝は身分制度が厳格であり、それは日本の江戸時代の士農工商に似た貴族・両班（ヤンバン 文武官）・中人（ジュンイン 技術系官職）・百姓・商工業者に区別されていた。この時代の服装は身分ならびに儀礼と日常などの状況に応じて厳しい規制があった。両班階層が履いた太子鞋（テサヘ）は底が革で、側面が絹や革であり、爪先と踵に太子紋（白の縞模様）があり、上流階級の女性が履いた雲鞋（ウンヘ）は雲紋が施してある（図5の鞋は1900年頃の作）¹¹⁾。これらの鞋の形は三国時代の縁の低い皮履に似ている。藁で作った草鞋や紙製の紙鞋は庶民が履いた。成年男子の通常礼服に着用する黒笠の頂部には馬毛が用いられた。

腰にする革帯については、上古より多用



図5 朝鮮時代の鞋
(上より雲鞋、鹿革鞋、太史鞋)

されたが、次第に糸帯や布帯が使用されるようになり減少し、朝鮮時代には用いられなくなった。ただし、軍隊での儀式のようなときに、鹿革の帯が使用された。高麗時代には、身分の高い者は金銀で飾った革帯を使用した⁹⁾¹⁰⁾。馬具についても身分によって素材が異なった。^{したぐら}韉に用いられた革は主に牛・馬のものであり、虎皮も使用されたが、女性には虎皮は禁じられていた。

朝鮮では上古より楽器を作って音楽を楽しんでいた。三国時代を経て、中国との交流によって一層発達し、日本にも伝わってきた。新羅楽には、笛や琴、鼓、琵琶等がある。琵琶は元々北方の胡族が馬上で弾いたものであり、新羅時代に始まるとある¹⁰⁾。同じような琵琶が中国や日本に存在していたことはすでに述べた。衣装をつけた舞者は紅の革帯をし、烏色の革靴を履いていた。高句麗楽では奏者が赤い靴を履き、舞者が黒い靴を履いた。百濟楽でも、舞者は革靴を履いていた。朝鮮の伝統的な砂時計型の杖鼓は中国から高麗時代に伝わり、朝廷の唐楽に用いられ、しだいに民間にも広まり、民謡や劇楽でも演奏された。胴は木を最上としたが、磁や瓦も使用され、それより大きい面に牛皮（左筒）と馬皮（右筒）を張った。杖鼓や太鼓、銅鑼、鉦等の打楽器で演奏される農楽はいつから始まったかははっきりしないが、農業と結びついて今日まで傳承されてきた¹¹⁾。

4. まとめ

マルコ・ポーロやシャルダンの紀行文から、中国に於いて皮革や毛皮が多量に使用されていたことを知ることが出来る。カーンの軍隊は茹でた水牛皮の鎧を身に付けており、馬乳を入れた革袋を携えていた。また装飾された衣類や革帯、革靴を王から贈られていた。中国の礼服は唐の時代および

それ以降の制度により、衣服の素材や色が身分によって決められており、革帯や皮冠、革靴の着用が定められていた。これらの制度は朝鮮や日本にも伝わった。

文 献

- 1) 秋山光和:原色日本の美 8, 絵巻物, 16版, 小学館 (1977) 図 88.
- 2) 王圻:三才図会 中, 上海古籍出版社 (1988) P. 1113, 1136, 1158, 1177, 1493.
- 3) 寺島良安:和漢三才図会, 日本庶民生活史料集成 28, 三一書房 (1980) P. 371, 448, 453, 558.
- 4) 月村辰雄 久保田勝一訳:全訳マルコ・ポーロ東方見聞録「驚異の書」fr.2810写本, 岩波書店 (2002) P. 57, 68, 94, 102, 121, 142.
- 5) Henry Yule Translation : "The Book of Ser Marco Polo", John Murray, London (1921) P. I -260, II -76, 394, 402, III-392.
- 6) G・クライトナー著 小谷裕幸 森田明訳:東洋紀行 3, 平凡社 (1992) P 150.
- 7) Pian de Carpini : "Contemporaries of Marco Polo", Edited by Manuel Komroff, third printing, Liveright Publishing Corp., New York (1937) P. 1.
- 8) William of Rubruck : "Contemporaries of Marco Polo", Edited by Manuel Komroff, third printing, Liveright Publishing Corp., New York (1937) P. 51.
- 9) 金英淑編著 中村古哉訳:韓国服飾文化事典, 東方出版, (2008) P. 27, 34, 216, 411.
- 10) 金富軾編 井上秀雄訳:三国史記 3, 平凡社 (1986) P. 95, 124.
- 11) The national folk museum of Korea : The collection of the national folk museum of Korea, Sigong Tech. Co., Ltd. (2007) P. 59, 85.